

本間敏雄の旧約本文研究について

小 友 聡

1. はじめに

本間敏雄先生は旧約聖書の本文学研究に精魂を傾けた、日本において稀有な旧約学者であった。2022年4月9日、突然、走り去るように75歳の生涯を終え、主のもとに召された。たくさんの学問的財産を遺して―。すでに2年近い歳月が流れたが、本間先生を記念する機会がないために、僭越ではあるが筆者が筆を執ることにした。先生は本学のヒブル語担当の非常勤講師として35年の長きにわたり本学学生たちにヒブル語文法の手ほどきをした。その総数はおそらく500名を超えるはずである。先生が改訂された『ヒブル語入門』による本学のヒブル語授業は、他の神学校や神学部に比べて群を抜くレベルであったと思う。先生の生涯最後の10年は聖書協会共同訳の言語翻訳に費やされた。その務めを果たされたあと病に倒れ、1年余りでご生涯を走り終えた。振り返って思うが、先生は本学の古典語非常勤講師として珠玉のような存在であった。この本間敏雄先生の名は記憶され続けなければならない。本論文は、本間敏雄（以下、敬称略）の旧約本文研究を俯瞰し、その学問的意義と重要性を要約して、後続の旧約学徒たちに伝えることを目的とする。

その前にまず、本間敏雄について経歴を概略する。本間敏雄は1947年に山形県鶴岡に生まれた。東北大学工学部で原子核工学を学んだが、卒業後は技術者の道に進まず、献身して関西聖書神学校に入学。日本イエス・キリスト教団の

牧師を志した。神学校を卒業後、1977年にドイツに留学し、ゲッティンゲン大学とチュービンゲン大学で旧約聖書の本文学を学んだ。ゲッティンゲンではW. ツィンマリから学び、チュービンゲンではH.P. リューガーの指導を受けた。ドイツで旧約本文学を専門に研究したのは日本では本間だけではないだろうか。本間は1982年に帰国し、日本イエス・キリスト教団新座教会の牧師を務めた。1987年に本学の左近淑教授に請われて本学ヒブル語文法の非常勤講師の任に就いた。高齢であった左近義慈先生がヒブル語文法の講師を引退し、その後を託されたのが本間である。以後、2021年4月に病床に伏すまで、本間は35年にわたり忠実にその務めを果たした。また、この35年の間に、本間は日本基督教団に転籍し、経堂緑岡教会、富士見町教会、船橋教会、新栄教会の牧師として誠実に伝道を担った。本間の牧師人生の歩みは常に東神大と共にあった。

旧約本文学の研究者として本間敏雄の主たる学問的業績は以下の通りである。

- 1) 論文「BHS、その本文の性格と問題点」、『福音主義神学』12号、1981年、1-23頁。
- 2) 論文「LとBHS、その本文の問題点と分析」、『福音主義神学』14号、1983年、1-26頁。
- 3) 連載「翻訳と本文」(全34回)、『形成』273～315号、1993～1997年。
- 4) 論文「アレppo写本と東西伝承」、『聖書学論集』30、1997年、1-62頁。
- 5) 論文「旧約本文の伝承営為とメシア預言に関する一考察」、『福音の神学と文化の神学』(倉松・近藤編、教文館)、1997年、325-354頁。
- 6) 翻訳：E. ヴェルトヴァイン『旧約聖書の本文研究—「ビブリア・ヘブライカ」入門』(日本キリスト教団出版局)、1999年。
- 7) 論文「セビリーン—その実像と解釈—旧約聖書本文伝承についての一考察」、『果てなき探究』(大野他編、教文館)、2002年、317-344頁。
- 8) ドイツ語論文：Der Aleppo Kodex und die Textüberlieferungen im Osten und im Westen: Historische Überlegungen zu den Masoretischen

Textüberlieferungen in Bezug auf die Ben Ascher Handschriften, AJBI
Vol.32, 2006, 15-91.

9) 『ヒブル語入門 [改訂増補版]』、教文館、2011年。

上記の他に、2010年以降、本間は日本聖書協会の聖書新翻訳事業に携わり、『聖書協会共同訳』の原語翻訳者として、とりわけ創世記の翻訳に精魂を傾けた。それについては個人としての学問的業績にカウントされないが、本間が創世記翻訳のために残した資料は膨大である。本論文は、上記の本間論文を具体的に紹介し、本間が旧約本文学についてどのような態度と知見と有したかを述べる。本論文は本間論文の詳細な書評や批評を目的としない。1980年以降、本間が何を考えたかを辿り、本間の知見を理解し、旧約学者としての本間の姿勢を記す。

2. 本間敏雄の諸論文（解題）

1) 「BHS、その本文の性格と問題点」、『福音主義神学』12号、1981年

旧約研究者として本間敏雄の最初の論文である。本間は30代半ばであった。チュービンゲン大学留学中に執筆したものである。レニングラード写本（L）とBHS（ビブリア・ヘブライカ・シュトットガルテンシア）の関係を論じた学術論文としては、おそらく日本で初めてのものであろう。BHSはヘブライ語聖書の底本であり、分冊であったものが1976年に完結した。それまでのBHK（キッテル版ビブリア・ヘブライカ）に変わり、新たに出版されたBHSについて、本間はいちはやくその特徴と問題点を指摘した。BHSを鵜呑みにするな。このテキストには批判されねばならない問題点が数多くある。それを筆者も東神大在学中に先輩たちからよく聞かされたが、本間はそのことを早くからの確に、完膚なきまで論じきった。BHSを批判的に見る視点を本間論文は教えてくれる。

以下、内容を要約する。BHSはBHKと同様にLを基底としているが、そこ

には問題点がある。写本の伝承は、西方（ティベリア）系と東方（バビロニア）系に分かれ、前者はさらにベン・アシェル系とベン・ナフタリ系に分かれる。Lはベン・アシェル系に属するが、決して純粋な型ではなく、カイロ預言者写本やアレppo写本に比べると混合した伝承の型を示す。Lは子音字については校正がされているが、母音、アクセント、ダゲシュ、ラーフェ、メセクについては混雑している。このような「Lを忠実に再現する」BHSにも当然、問題性が見られるのである。BHS欄外のアパルト（アパラタス）を検証するならば、sicL（レニングラード写本によって）という略語表記においては、BHSはLの読みに忠実であろうとしながら、場合によってはLとは別の読みを取り入れることがある。以前のBHKの誤りを克服できていない箇所もある。要するに、Lの読みそのものが微妙な問題を含んでいるゆえに、BHSもまた誤った判断や、不用意な判断をしているということである。Lの読みが微妙であるのだから、厳密には、最も重要なベン・アシェル系写本、すなわちアレppo写本との校合が必要となる。いずれにせよ、BHSの序文でエリガーとルドルフが「Lを忠実に再現する」という試みは実現していないのである。sicLというアパルトの表記自体が「揺れ」を告白しているのである。

以上が本論文の要約だが、本間は創世記における sicL の具体的な箇所40か所について、ダゲシュ、マッピーク、母音などに分類し、極めて詳細に sicL の分析と検討を行っている。旧約本文について知見を持つ学徒でなければ、本論文をきちんと読み解くことはできない。けれども、逆にまた、この論文によって BHS について基礎的知見を学ぶこともできる。そういう意味では、旧約本文を学ぶ学徒にとってこの論文は必須の文献に数えられてよいだろう。

本間は本論文の最後に、「聖なる神の言葉の正しい伝承のために人知れず労苦するひとりの人間の姿」ということを書いている。客観的に確かなヘブライ語本文の読みを突きとめようと努力しても、主観的な判断が紛れ込んでしまう危うさと、それでも学問し続けることの大切さと本間自身の覚悟がそこに読み取れる。

2) 「LとBHS、その本文の問題点と分析」、『福音主義神学』14号、1983年

本論文は1)の続きと言ってよい。本間は、1)で分析したBHS創世記のアパルト分析をヘブライ語聖書全体に広げ、BHSがL（レニングラード写本）とどうかかわっているかを検証した。この具体的な検証はここでは省略するが、全体と言えるのは、BHS本文が修正を要する箇所があるのみならず、Lの読み自体に問題がある可能性もあるということである。

本間はLの読み自体の問題性に注目し、ベン・アシェル写本と、また西方マソラという視点からBHSとLの関係を検証した。その結果、BHSのアパルトに関しては、ほぼ1)と同様の結論となる。すなわち、ヘブライ語聖書全体において、L自体に問題がある読みに関してはBHSに揺れがあるということである。また、方法論の問題点として、本間は次のことを指摘した。すなわち、BHSはLをきちんと検証しておらず、Lに問題がある場合にはアレppo写本との精密な校合が必要である。さらに、Lの読みに問題がある場合に、常識的に簡単に処理をせず、背後にある複雑な写本伝統の相克を読み取る判断力が必要とされる。

Lの読みに問題がある場合には、さらに複雑なことがある。それは、L本来の読みがL自体の中で既に修正されている箇所が少なくないということである。そこで、本間は、Lとカイロ預言者写本およびアレppo写本の読みが、西方系と東方系の読みの相違のリスト（ヒルフィーム）によって修正されている箇所を分析した。このヒルフィームによる修正箇所を本間はすべて列挙した上で、それらの分析から次の結論を引き出す。すなわち、BHSにはL本来の読みを提示するだけで、ヒルフィーム伝承によって修正されている事実が看過されている箇所がある。さらに、Lに比べると、アレppo写本はヒルフィームの修正がはなはだ多く、これらの修正は読みの「西方化」を方向づけている、ということである。このヒルフィーム伝承は歴史の流れの中で権威ある伝承となり、カイロ預言者写本を記したモーシェ・ベン・アシェルの時代に確立したとされる。

この論文は、1)と共に、本間がBHSをどう評価しているかを示している。

BHSはBHKを克服し、Lを忠実に再現することを目指しているが、それは必ずしも成功しているとは言えないということである。それどころか、L自体に問題が含まれるのであって、それがきちんと克服されなければ、ヘブライ語聖書の決定的な底本にはなりえないのではないか。本間はヒルフィーム伝承による修正を重要視するが、それだけでないようである。明記されていないが、Lよりも、むしろアレppo写本に忠実なヘブライ語聖書の底本をめざしているように思われる。これは4)の論文への橋渡しとなる。

3) 連載「翻訳と本文」(全34回)、『形成』273～315号、1993～1997年

本間は雑誌『形成』に34回にわたって「翻訳と本文」というテーマで小論文を連載した。旧約の様々なテキストを取り上げ、毎回、サブタイトルを付した読み切りの論文である。ケテブ・ケレーやソーフェリームの訂正など、旧約本文の諸問題について4年間、本間は牧師職で多忙であるにもかかわらず、ほとんど毎月、原稿を執筆した。34回分の合本を作成すれば、大部の論文集になったはずである。

内容的に非常に興味深い連載で、たくさん紹介したいが、ここでは一つだけ評者の印象に残る第22回の議論を紹介する。かつて左近淑は哀歌3章20節の「わが魂はうなだれる」に写本家の訂正を指摘し、神の下降的救済を読み取る解釈をしたことがある¹⁾。しかし、本間はこの箇所における写本家の訂正について厳密に検証した上で、左近のように読むことはできないと批判した²⁾。この箇所に写本家の訂正が果たしてあるかについて、オクラ・ウェオクラにはこの箇所がソーフェリームの修正箇所として挙げられてはならず、またユダヤ教の代表的注解者ラシなども指摘していない。本間はそのことを指摘している。

この連載の中ではまた、しばしば新共同訳の翻訳について課題が指摘されていて、本間の聖書翻訳への強い関心がうかがわれる。この連載の10年後に本間は聖書協会共同訳の原語翻訳者として創世記の翻訳に精魂を傾けることになった。本間は連載の最終回である第34回をこういう言葉で締め括っている。「不明瞭性と多義性も聖典の本質に属すると言い得るのである。それ故、教会はこ

れを負の遺産としてではなく、真理を目指して巡礼の道のりを歩む者たちに与えられた積極的な課題として受け止める。」³⁾ 正典本文をめぐる問題が尽きないことを本間は神の配慮とみた。本文研究者としての本間の立ち位置がわかる結論と言える。

4) 「アレppo写本と東西伝承」、『聖書学論集』30、1997年

この論文は、1) と2) の延長線上にあり、到達点と言ってよい。本間が最も力を傾注して執筆した論文である。『聖書学論集』30号に掲載され、60頁におよぶ長大な学術論文である。これは、もともと1995年に聖書学研究所で発表されたもので、本間がチュービンゲン大学留学中に師事したH.P.Rüger教授を記念して纏めた論文であることが注に記されている。以下がその要約である。

前述の2) ではヒルフィームの重要性が指摘された。ヒルフィームとは東西本文の相違を列記した一覧表であり、それはL(レニングラード写本)の巻末マソラの中に見出される。「東方」はバビロニア系本文伝承であり、「西方」はティベリア系本文伝承である。紀元70年のユダヤ戦争以降、二つの学派がマソラ伝承の核となるが、9世紀に入るとバビロニア学派(東方学派)がティベリア学派(西方学派)を凌いだ。西方学派はベン・アシェル伝統とベン・ナフタリ伝統に分かれ、前者が主流となって現代に至る。他方、東方学派は、その本文伝統が「ペテルブルク預言者写本」に見られるように、母音符号やアクセント記号などがティベリア方式とは異なっており、次第に衰退した。これら二つの東西マソラ学派間の本文伝承の相違がLの巻末マソラのヒルフィームに見出されるのである。

Lのヒルフィームに列挙されている本文箇所は251である。これを本間はすべて検証した。なお、モーセ五書などアレppo写本の巻末マソラは失われており、また、カイロ預言者写本は「預言者」に限定される。それを踏まえて、本間はヒルフィームの問題個所に注目するのである。極めて詳細な分析が本論文の中でされている。

これらの検証から、本間はアレppo写本におけるヒルフィーム修正箇所がL

に比べて極めて多いこと、またこれらの修正が本文の西方化を目指していることを挙げる。この結論はすでに2)でも提示されているが、さらに、本間ハベン・アシェル系の本文形成が明らかにC（カイロ預言者写本、895年）⇒A（アレppo写本、930年）⇒L（レニングラード写本、1008年）という流れを示していると述べる。

アレppo写本をめぐっては、カライ派とラビ派の確執があったと本間は見える。カライ派とはカライテ派とも呼ばれ、8世紀以降、タルムードを退けて伝統的ラビ派に対抗し、独自の正典主義を貫いた学派である。カイロ預言者写本はカライ派教団の所有であり、アレppo写本の作成に携わった書記やマソラ学派もカライ派であったようである。

結論として、本間はヒルフイーム伝承において次のように考える。まず、東方において会堂での朗唱のために正確な発音の確定が必要となり、母音記号が発案された。その後、より精密な方式が要請され、アクセント記号も加わり、西方のカライ派によりティベリア方式が誕生した。それが後にアレppo写本に結実した。このアレppo写本がLに決定的影響を与えたのである。ヒルフイームは、東方方式と西方方式の数世紀にわたる確執の時代を経て、徐々に形成された。10世紀末ユダヤ教の中心がバビロニアからパレスチナに移動するにつれ、東方子音字本文は、母音やアクセント方式を含め、西方本文に駆逐された。しかし、アレppo写本には部分的ではあるが、東方子音字本文が保存されている。いずれにせよ、アレppo写本は、すべての写本がそれによって校正されなければならない規範的コーデクスなのである。

以上の論文要約から、本間がL（レニングラード写本）ではなく、アレppo写本を底本としてヘブライ語聖書は読まれねばならないと主張していることが明らかだ。しかし、同時に、カイロ預言者写本、アレppo写本、レニングラード写本というベン・アシェル系の代表的写本に見られる多くの修正において、東西のユダヤ教団が正典を正典として証言しようとした歴史の掛け替えのなさを本間は凝視している。

5) 「旧約本文の伝承営為とメシア預言に関する一考察」、『福音の神学と文化の神学』（倉松・近藤編、教文館）、1997年

本論文は、教義学者・佐藤敏夫先生の75歳を記念する献呈論文集『福音の神学と文化の神学』に掲載された論文である。佐藤敏夫は本間の同郷の先輩であり、本学の神学教育に携わる本間は佐藤に深い尊敬の念を抱いていた。

この論文はイザヤ書のインマヌエル預言のテキストを本文批判的に論じたものである。まず、7章6節の人物の伝承本文「タブアル」に注目する。この人名は、西方系のベン・アシェル写本群、カイロ預言者写本、アレppo写本、レニングラード写本において共通に伝承されている。これはハパックスレゴメノン（ヘブライ語聖書に1度しか出てこない単語）であり、子音字レベルで同一の語がエズラ記4章7節に「タベエル」なる人物として出てくる。これは「エル（神）は良い」という意味である。一方、レニングラード預言者写本（東方系）では、イザヤ書の当該箇所の人名は「タベアール」である。問題となるのはヘブライ語伝承本文の「タブアル」である。「アル」は否定辞であるゆえに、「タブアル」は「ろくでなし」という意味となる。重要なことは、西方系のティベリア学派の3つの写本において伝承本文が固定化していることである。本間はこの、紀元後のキリスト教との対決の可能性を見る。

14節の「おとめが身籠って」産む男の子の名は「インマヌエル」（神われらと共にいます）である。その「我ら」は、後代のユダヤ教学者にとってはユダヤ教団であり、「インマヌエル」はこのユダヤ教団と共なる神的王である。その王が敵対者「タブアルの子」を滅ぼす者に他ならない。一方、キリスト教はこのテキストをイエス・キリストなる「メシア」を根拠づける中心箇所とした。これに対抗し、ユダヤ教団はイエスを「タブアルの子」と呼んで、反撃したのである。つまり、「インマヌエル」を、＜偽メシア＞「タブアルの子」を滅ぼす者にしたのである。もとより14節のヘブライ語「おとめ」は処女ではなく、若い婦人を意味する。周知のとおり、キリスト教はギリシア語70人訳の「パルセノス」（処女）を根拠にしてユダヤ教団に反論した。そのためユダヤ教団は70人訳を見限ったのである。このこともあり、ユダヤ教団はヘブライ語伝

承本文の確定にさいして、6節について護教的な対応を迫られたのである。

本間はまだ一つ、イザヤ書40章3節の預言に注目する。「荒れ野で」という単語の伝承本文に付されたアクセント記号における区分の仕方が問題となる。ベン・アシェル系の3つの写本では、「荒れ野で」はそれに続く「主の道を備えよ」に掛かる。一方、70人訳は「声が荒れ野で叫んでいる」となる。マソラ学者はユダヤ教団の本文営為として、キリスト教的な区切り方に対して弁証的な意図を示したと本間は説明する。というのも、キリスト教会は「荒れ野で呼ばれる者の声」を洗礼者ヨハネとみなし、メシアの先駆けとしたからである。

さらに本間はゼカリヤ書12章10節を取り上げる。この箇所をキリスト受難預言のテキストとしてキリスト教会は利用しようとしたが、それに対し、ユダヤ教団は「刺された者」が神的存在であるという解釈を論破する読みを伝承したと本間は見る。

以上、本間はメシア預言の幾つかの旧約テキストにおいて、キリスト教会がメシア預言の成就という形で福音を弁証したとき、ユダヤ教団は対処を要求され、マソラ学者による本文確定の作業においてそれを行ったと結論する。ユダヤ教団とキリスト教会がそれぞれに対抗して、テキストを我が物にしようとしたのである。旧約テキストを本文批判的アプローチによって歴史的に論じたこの論文は極めて明快で、納得のいくものである。

6) 翻訳：E. ヴェルトヴァイン『旧約聖書の本文研究—「ビブリア・ヘブライカ」入門』（日本キリスト教団出版局）、1999年

これは本間による翻訳書だが、本間の研究領域を網羅する内容のドイツ語圏の専門書である（E. Würthwein, *Der Text des Alten Testaments*, 1952）。もともと鍋谷堯爾氏による翻訳（聖文社、1977年）が存在したが、原著の第5版が1988年に刊行されたため、本間がそれに基づき忠実に訳し直したのである。それゆえ鍋谷氏との共訳になっている。これは旧約本文学の基礎的な知識を得るために重要であるが、とりわけ巻末に多くの写真が載っていて、学習者には魅力がある⁴⁾。本間はこの翻訳を90年頃までに終えていたが、新版の出版までに

は時間がかかった⁵⁾。本文研究には必須の書であって、読み続けられる良書である。

7) 論文「セビリーン —その実像と解釈— 旧約聖書本文伝承についての一考察」、『果てなき探究』（大野他編、教文館）、2002年

本論文の執筆については逸話がある。それは左近淑の発言がきっかけであった。左近は、本学での授業において、本間が「セビリーン」について論文を書いていると誤って学生たちに語った。おそらく、本間が「ヒルフィーム」について書いたことを左近は「セビリーン」と勘違いしたのであろう。それが『旧約緒論講義』に収録されたために⁶⁾、本間は遅ればせながらそれを実現する論文を左近の召天10年記念論文集に寄稿したのである。

セビリーンとは、「彼らは思う」「人々は考えている」という意味であって、マソラ本文の諸現象の一つである。「彼ら」「人々」とはユダヤ教団の正典本文伝承に関わった人々か、マソラ学者あるいは写本家であったと想定される。ただし、「考えている」と何かがはっきりしない。その問いに答えるため、本間は主として『マソラマグナ』によって、セビリーンに該当する約240箇所、66項目を検証した。それが本論文である。

極めて精緻な検証の結果として、本間は次のように評価する。まず、これまで「彼らは思う」について、これを肯定的発言と受け取り、「そう読むべきだ」と解釈する提案があった。他方、逆に、「人々はそう考えるが、実際はそうではない」と解釈する見方もあった。これについて、セビリーンとケレーについて関係している箇所があるが、両者は決して同質ではないと本間を見る。ケレーはいわば公的写本によって確認された本文であって、それに対し、セビリーンは公的には支持されなかった読み方であり、「ある人々の考え」というニュアンスであると本間は結論づける。

さらに本間は、第二ラビ聖書に頻出するセビリーンが、ベン・アシェル系の写本群の大小マソラに実際に見られ、また東方系写本の大マソラにも見られる点に注目する。本間によれば、後代になるほど写本家と写本数、研究者も増加

したので、私的な写本における誤用や主観性が本文に入り込む可能性が増大した。これを解決することはマソラ学者たちによって焦眉の問題であったと説明できる。それがセビリーン注記に現れているのである。そこで、本間は中世マソラ学者エリア・レビタの見解を支持する。つまり、セビリーンは本文的腐敗や意識的・無意識的変更から本文を守るための行為だったのである。それは、ラビ・アキバの言葉と伝えられるように、「マソラは律法の垣」だということを端的に示している。

8) ドイツ語論文:Der Aleppo Kodex und die Textüberlieferungen im Osten und im Westen: Historische Überlegungen zu den Masoretischen Textüberlieferungen in Bezug auf die Ben Ascher Handschriften, AJBI Vol.32, 2006, 15-91.

本論文は、4) の論文をドイツ語に訳したものだが、4) を書き改めたということが注に記されている。また、4) にもあったが、本間がチュービンゲン大学中に指導を受けた故H.P.Rüger教授を記念する論文だとも書かれている。論文の構造と結論については、4) と同一なので、ここでは内容紹介を省略する。

9) 『ヒブル語入門 [改訂増補版]』、教文館、2011年

本間は35年間、本学でヘブル語文法を教えた。非常勤講師就任当初、左近義慈著『ヒブル語入門』（1966年初版）を教科書に用いた。しかし、この教科書は解説が少なく、使いづらいという課題があるため、本間は大幅な改訂版を作成することにした。その結果、生まれたのが本書である。改訂増補版だが、本間が全面的に書き直した新たなヒブル語文法書と言ってよい。旧版は202頁だが、この改訂増補版は473頁におよぶ。つまり倍以上の頁数である。本書はヒブル語「入門書」と言うより、「中級文法書」と言ってよいだろう。とりわけ、巻末にある「構文論」は本間が試論として新たに書き加えたもので重要である。また、「補説：本文の諸現象」はマソラ本文入門として本間が執筆したものである。本書は旧約本文について基本的な知識を得るのに非常に役に立

つ。たとえば、7) のセビリーン問題についても、本間自身の理解が記されている⁷⁾。本書は、日本におけるヘブライ語教本として最も信頼しうる、また最高水準の文法書である。この文法書は今後も長く使用されるはずであり、本間敏雄の名前はその著者として記憶され続けるだろう。本書は旧約学者である本間敏雄が最後に執筆した書であると同時に、本間が精魂を傾けた代表的著作である。

3. 本間敏雄の旧約本文研究

1) 本間の旧約本文学の特徴

本間敏雄の旧約本文学研究について筆者は多くを語る資格はないが、本間は日本で数少ない旧約本文学の第一人者であった。BHSを鵜呑みにせず、BHSの問題性を知り尽くしたうえで、ヘブライ語原文の本来の読みにとことんまでこだわった。ヘブライ語本文は子音字と母音符号、アクセント記号からなる。子音字は同じでも母音符号やアクセント記号の違いによって、微妙に意味が変化する。たった一つの単語について、その本来の読みを確定するために本間は果てしない時間と労力を惜しまなかった。どの読みが最も妥当かを検証する本文批評に精魂を傾け続けた旧約研究者として本間は日本の旧約学を代表した。

本間の諸論文を閲読して筆者が言えることは、本間はテキストの客観性を徹底して追究したということである。多くの学者はBHSのテキストに信頼し、BHSに載っている諸写本や古代訳の情報から釈義の知見を得るが、BHSそのものに限界があることをほとんど考慮しない。また、BHSの限界に気づいても、BHSを相対化してテキスト伝承を根源的に探究するということはない。現在刊行中のBHQについても同様である。それに対し、本間はセビリーンの研究でもわかるように、マソラ学者が非公式だが重要と考えて残した資料まですべて検証し、そこから何を言えるかを調べ上げた。テキスト本文について、BHSは現在において一つの標準的底本にすぎないことを本間は繰り返し指摘している。

本間が諸論文で挙げる本文伝承に関する膨大な資料データと、そこから引き出される結論は、まるで自然科学者があらゆる実験のデータを解析し、そこから客観的で妥当な結論を述べることに似ている。テキストに関する研究者の主観的考察ではなく、テキストそのものの客観性から結論を導き出す本間の態度は、筆者の率直な感想だが、自然科学的だと言える。それは、本間が原子核工学を学んだことと無関係ではないだろう。

しかし、本間はまた徹底して歴史的に思考する。伝承の形成過程のありようを本間は丹念に説明している。複数の読みの選択肢の中で、どの伝承がより古いかを考え、最も古いものに本来の伝承を見ようとする。自然科学的な客観性を重んじるのみならず、徹底して歴史的に、通時的に思考するのである。今あるテキストを絶対的なものとして共時的に扱う偏狭な正典論者とはまったく性格を異にする。

さらに言えることは、本間が柔軟で、寛容な姿勢を貫いているということである。テキストの読みについて、さまざまな可能性があることを本間は確認し、それを精査し、最も客観的に説明できる結論を目指す、100%確実な伝承に辿り着くことはできない。そのような本文の読みの多様性と不確実性を、本間はそのまま受容する。つまり、提示すべき最終的な結論を保留するのである。本間の論文はしばしば分かりづらいと評されるのは、そのことにあたるかも知れない。本間は、本文の読みを伝承した写本家たちとその背後にある共同体に対して敬意を表している。本文を伝承するために先人が全力を尽くしたことを忘れず、それを正しく継承する本文研究者の務めを本間は見つめていた。本間は正典である聖書の重さというものを誰よりも深く受け止めていたのではないかと評者は思う。

本間が貫いた学問的な探求方法は、ドイツで学んだH.P.リューガーやE.ヴェルトヴァインの方法だといってよいだろう。本間はドイツの旧約本文学を継承している。ドイツの旧約本文学は、プロテスタントの聖書学の伝統の延長線上にある。本間は教会での説教準備において、注解書は常にドイツ語のATDを用いるなど、ドイツ聖書学の積義的方法を最後まで貫いた。本間が2006年に

ドイツ語で書いた論文は、その25年前にチュービンゲン大学で指導を受けた故リューガー教授を記念したものである。いささか私見が混じるが、本間は実利的な英語圏の本文学や聖書解釈学に拠らず、ドイツ語圏のクリティカルな文献を常に用いた。

本間の本文研究の特徴として、最後に触れなければならないことがある。それは、本間が最も重要と考えたヘブライ語底本がBHSではなく、アレppo写本であったということである。ベン・アシェル系の写本群の中で、レニングラード写本よりも古く、かつ重要なアレppo写本を基準とすることを本間は繰り返し強調している。後で述べるが、本間はアレppo写本の貴重なコピー製本を所蔵しており、この写本に信頼を置いていた。

2) 旧約学者・本間敏雄について

本間は本文研究に打ち込み、東神大で35年にわたりヘブライ語文法を教えたが、それは牧師を本務としてのことである。旧約学者本間は牧師として教会の任務を最後まで果たした。本間はもともと日本イエス・キリスト教団に所属し、新座教会牧師を務めた。しかし、東神大で教鞭を執るようになり、日本基督教団に転籍した。経堂緑岡教会、富士見町教会、船橋教会、新栄教会の牧師を歴任した。日本ではいわゆる福音派に属する日本イエス・キリスト教団から日本基督教団への転入は少なからずストレスがあったに違いない。しかし、牧師であることを最優先して、本間はヘブライ語文法と旧約原典釈義のクラスを淡々と続けた。かつて東神大の旧約部門の専任教員を一名増やす計画をしたとき、筆者は大住教授と相談して本間を専任教員に迎えるための説得を試みたことがある。けれども、本間は、日本基督教団の牧師養成は自分にはできないと固辞し、これまで通り非常勤講師のスタンスを選び取った。牧師として教会で福音を説き、ヘブライ語教育に打ち込むことが本間の生き甲斐であったと筆者は理解している。

今となっては晩年と言わざるを得ないが、本間は2010年から2018年まで日本聖書協会の新聖書翻訳出版事業に原典翻訳者として携わった。とりわけ創世記

の翻訳のために膨大な資料を作成し、テキストの正確な翻訳に打ち込んだ。本間がそのために残した資料は段ボール箱で10個に及ぶ。聖書協会共同訳の創世記の翻訳には、筆者の印象だが、本間の息遣いが聞こえてくる⁸⁾。

本間は飄々として、自らを飾らず、自慢せず、謙虚に、与えられた使命を淡々と果たすという姿勢を貫いた。優しさと強さを併せ持つ教師であった。説教者としてチャペルの講壇に立ったとき、処女降誕について説く本間が両手をひらひら動かすパフォーマンスで天使を真似し、ユーモアを交えて語った姿を思い出す。そういう本間が丁寧に語る授業は多くの神学生たちに歓迎された。本間は名物教師であった。

本間は旧約学者として、論文を書くことよりもヘブライ語文法を教授することに時間を割き、また旧約本文学の翻訳をし、浩瀚なヘブライ語文法書改訂版を出版し、そして聖書協会共同訳の旧約聖書原典翻訳に力を注いだ。牧師本間敏雄は最期までよき神学教師であった。間違いないことだが、本間が訳し、また執筆した専門書籍はいずれも神学教育の現場で用いられ続ける、歴史的に価値あるものである。それらの書籍は本間が残したものとして記憶され続けるであろう。

結びとして：本間敏雄の個人的な思い出

本間について、筆者は忘れがたい思い出がある。それは35年前、後期課程在学中に、友人の故重富勝己と一緒に本間が住む新座市の牧師館を訪ねたことである⁹⁾。2階の狭い書斎に入らせてもらったとき、本間は自慢げに「君たちに僕の宝物を見せるよ」と、天井裏に保管していたアレppo写本の複製本を見せてくれた。ドイツで購入した、おそらく数十万円、いやそれ以上であろう高価で貴重な書籍である。筆者は衝撃を受け、また羨望を抱いた。「こんなふうにテキスト研究に打ち込む牧師が日本にいるのだ、こういう牧師になりたい」と筆者は思った。以来、筆者にとって本間はずっと憧れの存在であった。

本間が病床に就いて間もなく、弱々しい声で筆者に電話があった。蔵書を東

神大で引き受けてくれないか、と。すべて引き受けると筆者は快諾した。それからしばらくして、夫人から本間の訃報と蔵書運搬について連絡をいただいた。蔵書のほとんどは遺言通り、神学生たちに引き取ってもらった。アレッポ写本の複製本は旧約研究室に保管した。本間が命のように大切にしていたこのアレッポ写本を東神大が所蔵することになった。

毎週火曜の夕方、ヒブル語文法のクラスを終えて、キャリーバックを引きながらバス停に向かう細身の本間の後姿が今も目に浮かぶ。本間の遺産を受け継ぐ者たちは、本間を記憶し続けなければならない。筆者はしみじみそう思う。本間の後姿を追いかけた筆者も間もなく定年となる。数年前、本間と一緒に聖書協会共同訳の翻訳を終えた頃、本間に声をかけたことがある。「本間先生、退職したら、一緒にゲゼニウスの文法書を翻訳しませんか」。本間は微笑んでくれたが、それは懐かしい思い出話になってしまいそうだ。東京神学大学には1987年から2022年まで、本間敏雄という傑出した旧約本文学者またヘブライ語教師がいた。本間は掛け替えのないものを我々に残してくれた。

(おとも・さとし)

注

- 1) 大島力編『説教集』(左近淑著作集第4巻)、教文館、1992年、160-162頁。
- 2) 本間敏雄「神を罪ありと？」『形成』299号、椎の樹会「形成」委員会、1995年、13頁。
- 3) 本間敏雄「偽りの悔い改め？」『形成』315号、同上、1997年、15頁。
- 4) ただし、旧版では、写真は巻末ではなく巻頭に載っている。
- 5) 大住雄一編『旧約聖書緒論講義』(左近淑著作集第3巻)、教文館、1995年、86頁。
- 6) 前掲書、102頁。
- 7) 『ヒブル語入門 [改訂増補版]』、教文館、2011年、348頁。
- 8) 本間敏雄「「人」か「アダム」か」大島/小友/島先編『ここが変わった「聖書協会共同訳」旧約編』、日本キリスト教団出版局、2022年、16-20頁。
- 9) 重富勝己は1989年に本学修士課程を修了し、大阪キリスト教短期大学教授およ

び日本フリー・メソジスト教団阪南キリスト教会牧師を務め、2022年12月14日に70歳で生涯を終えた。日本旧約学会会員。主要論文は「旧約聖書に見る終末論と祈り」『福音主義神学』31号、2000年、5-31頁。